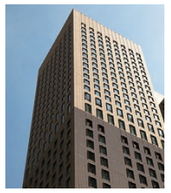


グローバル展開の加速に向けて 生産・物流・販売の一品別見える化を強化

22カ国の情報を本社主導で一元的に取得・分析

背景

“アジアを代表するグローバルプレイヤー”という経営ビジョンの実現に向けて、成長戦略を支える情報化基盤を確立する。その一環として、グローバルな生産・物流・販売情報の「一品別見える化」を強化する。

ソリューション

海外拠点の情報を収集・分析するシステム「GINGA」を国内マーケティングシステム基盤上に再構築。海外情報の精度を高めるとともに、国内マーケティングシステムと同じBIツールで同等の自由分析を可能にする。

成果

22カ国35拠点にわたるグローバルな生産・物流・販売情報を本社主導で一元的に取得・分析できる仕組みが完成した。システムの操作性や性能も大幅に向上したため、システム利用者の業務生産性が高まった。

株式会社資生堂
国際事業部
国際ロジスティクス部
参事
西住 貴裕氏

株式会社資生堂
国際事業部
国際ロジスティクス部
森 健二氏

株式会社資生堂
情報企画部
課長
三浦 昭宏氏

株式会社資生堂
情報企画部
田中 真一郎氏

経営品質向上へ、生産・物流・販売情報の収集・分析システムを強化

“日本をオリジンとし、アジアを代表するグローバルプレイヤー”という経営ビジョンの実現を長期経営計画として掲げる資生堂。成長戦略を支える情報化基盤の確立に向け、SAP ERPを基幹業務システムとしてグローバル展開するとともに、本社からグローバルな生産・物流・販売情報の一品別情報を収集・分析する「GINGA」の強化を進めている。

同社が「GINGA」の再構築を検討したのは2010年8月ごろである。同システムは2002年に構築したものだが、収集した情報の定義が海外現地法人ごとに異なる、収集した情報の分析内容が定型的なものに限られる、などの課題があった。新しく構築するシステムでは生産・物流・販売情報の定義を海外の全現地法人で標準化するとともに、情報の収集方法を改善し、情報の精度や分析の自由度を高めることを目指した。

NSSOLが構築した国内事業向け分析システムの基盤を活用

要件を基に、複数のソリューションを比較した結果、資生堂は国内マーケティングシステム基盤上に新システムを再構築する方法を採用。同システムを構築した新日鉄ソリューションズ(NSSOL)をプロジェクトのパートナーに選択する。

新システム構築プロジェクトは2010年10月から始まった。まず、世界22カ国35拠点を対象に、現地で稼働する基幹業務システムの種類やシステムが保持するデータの内容などを詳細に調査。収集する情報の定義標準化および情報収集方法の変更を進めた。NSSOLは各拠点の担当者と、英語のメールや電話会議などによるコミュニケーションを行って、効率的にプロジェクトを進めた。SAP ERPのグローバル展開は進行中だったため、多様なシステムからの情報収集が必要になったが、丹念に対応した。

22カ国の拠点の情報を本社主導で取得、一品別の分析を実現

新「GINGA」は、2012年1月から稼働を開始した。同システムでは、グローバルな生産・物流・販売情報を海外現地法人の基幹業務システムから本社主導で取得しており、各国の商流および物流が整理され、取得する情報の意味を明確化するとともに、一品別/日別/得意先別の情報に対する自由分析が可能になった。また、システムの操作性が高まり、システムの性能が大幅に向上したため、分析業務の生産性が向上している。

今後は、他システムとの整合性強化や、計画情報や予測値を登録・管理する機能を追加し、サプライチェーン全体のマネジメントまでを支援できるようにシステムの付加価値を高めていく予定である。

SHISEIDO

株式会社資生堂
本社：東京都中央区銀座7-5-5
創業：1872年
資本金：645億円（2012年3月31日現在）
売上高：単独2248億円/連結6823億円（2012年3月期）
従業員数：単独3699名/連結3万1310名（2011年3月31日現在）

Key to Success

資生堂が「GINGA」の再構築に取り組んだ背景は、グローバルな生産・物流・販売情報に関する一品別見える化の強化が不可欠との判断があった。

情報企画部 課長の三浦昭宏氏は「以前は、海外現地法人ごとの解釈で情報が提供されており、定義や送信タイミングが違う情報が混じっていました」と振り返る。

「GINGA」再構築の検討は2010年8月に始まった。国際事業部 国際ロジスティクス部 参事の西住貴裕氏は、「システム利用者に対するヒアリングやディスカッションを約2カ月にわたり行い、要望をまとめました」と語る。

構築プロジェクトがスタートしたのは、2010年10月である。資生堂は新「GINGA」を稼働させる基盤として、2008年に稼働した国内事業向けマーケティングシステム「B-NASS（ビーナス）」の採用を決め、同システムを構築した新日鉄ソリューションズ（NSSOL）をパートナーに選定する。

しかし、プロジェクトが乗り越えるべき課題は少なくなかった。

資生堂は、基幹業務システムとしてSAP ERPのグローバル展開を行っているが、プロジェクトが進行中のため、海外現地法人のシステムは、SAP ERPのほか、Oracle JD Edwardsなどさまざまなものが混在している。

そこで新「GINGA」構築プロジェクトでは、2011年1月から3カ月かけて、海外現地法人のシステムを調査。その結果得た対応難易度を基に海外現地法人を二つのグループに分けて、段階的に新「GINGA」への対応を進めた。

NSSOLは事前調査の段階から資生堂を支援した。新「GINGA」の意義や、海外現地法人から資生堂本社が取得したい情報を詳しく定義し（標準ドキュメントを作成）配布。極力メールでのやり取りや電話会議などによって海外現地法人の担当者に対応を求めた。必要不可欠と判断した場合は資生堂のプロジェクトメンバーの海外出張に同行し、海外現地法人のIT担当者やITベンダーとの打ち合わせや交渉を行っている。

予期せぬシステム変更も NSSOLのエンジニアが対応

NSSOLの働きぶりに対する資生堂の評価は高い。

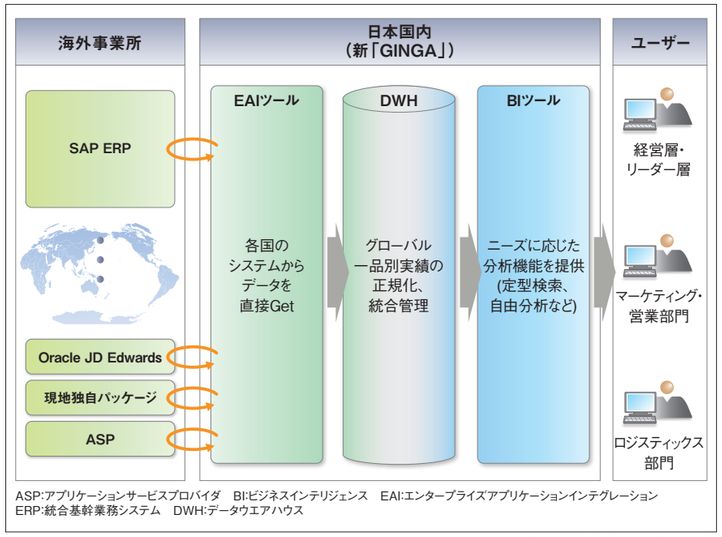
国際事業部 国際ロジスティクス部の森健二氏は「予期せぬ運用方法の違いが明らかになるなど、開発段階では少なくない変更要件が発生しましたが、NSSOLのエンジニアは必ず対応しました」と振り返る。

情報企画部の田中真一郎氏は、「各国の基幹業務システムは多種多様でコード体系も新旧異なるなか、NSSOLは詳細な情報収集や商物流の整理を丹念に行うことにより、正確な一品別/日別/得意先別の情報取得を実現してくれました」と評価する。

こうして資生堂は、新「GINGA」を活用して、グローバルな生産・物流・販売情報を本社主導で取得・分析する仕組みを完成させた。

今後について西住氏は「計画値の取り込みなどで付加価値を高めるとともに海外現地法人とのコミュニケーションを継続的に行い、データ精度を劣化させないための活動などを行っていきます」と語る。

■資生堂が導入した新「GINGA」の概要



GINGAは資生堂社内システムの名称

■コアテクノロジー
BI、自由分析、システム連携

■システム概要
●サーバー：DBサーバー（IBM Power 570）×6、Web APサーバー（Linux）×9 ほか
●ミドルウエア：Oracle BIEE、Oracle Database 10g RAC
●クライアント：200台（海外）